第 9 回多国籍企業学会全国大会

「統一論題」報告要旨

# ヒストリカル・アプローチによる多国籍企業研究の動向、意義、課題

広島経済大学　山内昌斗

本報告の目的は、ヒストリカル・アプローチによる多国籍企業研究の動向を概観するとともに、それら研究の今日的な意義と、研究上の課題を提示することにある。

歴史研究としての方法論的自覚を持った研究者、いわゆるヒストリアンの手による多国籍企業研究が数多く蓄積されている。Mira Wilkins (1970) *The Emergence of Multinational Enterprise*、Mark Mason (1992) *American multinationals and Japan*、Howard Cox (2000) *The global cigarette*、Geoffrey Jones (1993) *British Multinational banking, 1830-1990*、桑原哲也(1990)『企業国際化の史的分析』、工藤章(1992)『イー・ゲー・ファルベンの対日戦略』、梅野巨利(2002)『中東石油利権と政治リスク』、川邉信雄(2011)『タイトヨタの経営史』などは、代表的な著作物である。

上記の研究からもわかるように、ヒストリカル・アプローチによる多国籍企業の研究領域は個別企業、個別産業、経営の一機能など多岐にわたる。他方、研究対象への接近方法に関しては、共通してみられる点がある。ひとつには、企業の資料室や公文書館から得られた膨大な史料、数的データ、文献などを利用し、新たな史実を発掘してきたことである。例えば、Geoffrey Jones はイギリス多国籍銀行の史的研究のために、銀行資料室にある持ち出し禁止の機密文章を読み解くほか、傍証可能なほどの膨大な史料や文献を利用し、170 年にわたるイギリス多国籍銀行の発展過程を分析している。

もうひとつは、理論的態度である。ヒストリアンは理論研究の成果を、歴史を理解するためのツールとして利用する。例えば、工藤はイー・ゲー・ファルベンの分析に際し、ダニングの折衷パラダイムから示唆を得ながら考察を試みている。ケースは仮説を検証するために、あるいは理論を実証するために存在するのではなく、歴史的事実そのものとして意味を持っている。ヒストリアンは企業個別の特殊性や、個のなかに内在する普遍性を見出そうとする。

このようにして蓄積されてきた研究からは、多くの教訓や知見が得られる。それは、過

去と現在の多国籍企業のリーダーたちが持つ世界観や、哲学、理念であったり、多国籍企業や、その周辺で関係する人々の意識や観念であったりする。こうした理解のもとで、表面的に現れてくる多国籍企業の企業行動や、経営管理を分析することができる。このような視点からの研究は、ヒストリアン特有のものであるといえる。

ただし、人類が蓄積してきた多国籍企業の歴史は、学び尽くせないほど豊富にある。ひとつひとつの歴史に重要な意味があるが、大局や全体像が読み取り難くなる。結果として、歴史研究の成果からは何が教訓や知見として得られるのか、現代的な研究の意義は何なのかを見出し難くしている。

その限界を打ち破ったものが、Geoffrey Jones (1995) *The Evolution of International Business* であり、さらに同書を掘り下げ、体系化した Geoffrey Jones (2005) *Multinational and Global Capitalism* であると筆者は考えている。前書はグローバル資本主義というマクロ的な環境を、後書は多国籍企業そのものへ関心を置きながら、19 世紀から今日に至る多国籍企業の歴史的な全容を提示している。同研究により、全体像のなかにおける個々の歴史研究の位置づけが可能となり、ヒストリカル・アプローチによる研究に新たな可能性を切り拓いている。

本報告では、以上のようなヒストリカル・アプローチによる多国籍企業研究の動向と研究の意義、今後の課題を取り上げる。そうすることで、ヒストリカル・アプローチによる多国籍企業研究の重要性を提示する。